

マルクス主義者と民族問題

ミシエル・レヴィ 著
丸山 敬一 訳

訳者はしがき

本稿は、Michael Löwy: *Marxists and the National Question*. (New Left Review. No. 96, March-April, 1976, pp. 81-100) の全訳である。一見して明らかのように、ここでは一〇人のマルクス主義者——マルクス、エンゲルス、ローザ・ルクセンブルク、トロツキー、パンネクック、シュトラッサー、カール・レンナー、オットー・バウアー、レーニン、スターリン——の民族理論の検討がなされている。私もまた近い将来、代表的なマルクス主義者の民族理論を相互に比較検討した一書を書きたいと思っているので、そのための参考資料として、本論文を邦訳することにした。私の研究が、いまだこれらのマルクス主義者のすべてに及んでいないので、今本稿の全面

的な検討をするだけの準備も能力もないが、さしあたり気づいた点を三点ほど覚え書き風に書きとめて「訳者はしがき」にかえたい。

一、本稿では、カウツキーについての言及が、原文でわずかに七行のみであって、その内容も否定的なものである。しかし、カウツキーは、そう簡単に無視してしまつてよい理論家ではない。後にレーニンが、カウツキーを「背教者」として厳しく批判するようになること周知の通りであるが、それ以前は、彼はカウツキーからきわめて多くの理論的影響を受けているのである。たとえば、ポーランド独立問題に関していえば、レーニンは、ポーランド社会党(PPS)の立場や、ローザ・ルクセンブルクの立場を退けて、カウツキーが論文「ポーランドの終末?」で提出した立場を正しいものとして引用している

『レーニン全集』第六巻、四七二—四七二ページ。第二〇巻、四六二ページをみよ。また、オットー・パウアーの大著『民族問題と社会民主党』に対するカウツキーの書評「民族性と国際性」をやはり正しいものと認め、その参照をすすめてもいる（『レーニン全集』第一九巻、一〇八ページをみよ）。スターリンにあたえたカウツキーの影響は、もっと大きなものがある。スターリンの有名な民族の定義のうち、「文化の共通性のうちにあらわれる心理状態の共通性」は、本稿の著者のいうようにパウアーから借りたものとしても、残りの三つ、すなわち、「言語の共通性」、「地域の共通性」、「経済生活の共通性」については、これらをカウツキーからそのままひきついだものであることは明らかである。このようなわずかな例だけを見ても、カウツキーがボルシェヴィキの民族理論の形成に与えた影響はきわめて大きなものがあるといわなければならない。その点で、私は本稿のようなカウツキーに対する否定的な扱いには賛成できない。むしろ、カウツキーについては、レーニンやルクセンブルクと並ぶ独立した見出しを設けて論ずるべきであると思う。

二、本稿には、「歴史なき民族」の理論は、根本的にマルクス主義に無縁なものである、という主張がみられる。しかし、その場合マルクス主義とは一体どのようなものだと著者は考えているのであろうか。その点に関しては何の説明もない。だが、本稿の全体をみると、著者がレーニンの民族理論にきわめて好意的であることがわかる。したがって、おそらくあらゆる

民族に民族自治権を認めるという立場をマルクス主義とみなしているのであろう。しかし、他方でマルクス主義者には、抜きがたい中央集権主義への過大な評価がある。マルクスもエンゲルスもレーニンもルクセンブルクも、一人の例外もなく、中央集権主義を歴史の進歩として高く評価している。その点からいえば、ヨーロッパが、いくつかの中央集権的な巨大国家から構成されることになり、弱小民族は、それらの巨大国家の中に併合され同化されてしまうことになると考えたとしても、それは全く自然なことであるというべきである。中央集権主義をマルクス主義に本質的なものとすれば、「歴史なき民族」の理論は、マルクス主義に無縁なものであるどころか、まさに本質的なものと言うべきであろう。むしろ、レーニンのように、一方で中央集権主義的の巨大国家形成の方向を歴史の必然として認めながら、他方で分離独立を認める民族自治権を主張することが、果して矛盾しないものであるかどうかこそが問われねばならないであろう。

三、すでに述べたように、本稿の著者は、レーニンの民族自治権論にきわめて高い評価を与えている。しかし、民族自治権は何ら万能薬ではない。まず東ヨーロッパのように、民族が混雑して住んでいるような地域には属地的な自治権論を適用することができない——ここから、まさにオーストロ・マルクス主義者の非属地的な民族自治論が生まれたのである——し、また、経済的自立が不可能な数万人や数十万人の小民族に政治的

独立を与えることが果して実際的であろうかという問題もある。

二で述べた内容とも関連することであるが、思うにレーニンの民族自決権論は大国を分割して小国をたくさん作れという理論ではなかった。彼は諸民族の平等を実現するためには、どんな小民族にも民族自決権を承認する必要があると考えたにすぎない。これは、あくまでも原則的要求であって、これら諸民族が、実際にこの権利を行使して分離独立した国家を形成するかどうかということは全く別の問題であった。むしろ、レーニンは、社会主義の究極の理想は「諸民族の接近と融合」であると主張し、大国家の中でさまざまな民族が「自由に平和のうちに仲よく暮らす」という完全な民族融合と同化の道を歩んでくれることを希望していた。つまり、民族自決権は、あくまでも民族間における民主主義実現のための原則的要求であって、実際の解決策としては、諸民族がみずから進んで大国家の中にとどまり、相並んで平和のうちに仲よく暮らすというのがレーニンの理想であった。

諸民族が大国家の中にそのままとどまるといふことになれば、そこでの民族問題の具体的解決策は、民族自治ということになるであろう。私は、従来、民族自決権論よりも民族自治論を充実させることの方が、民族問題の実際の解決にはより有益であると考えている。その意味で、オーストロ・マルクス主義者やローザ・ルクセンブルクの民族自治論にもっと高い評価を

与えるべきではないかと思うのである。

本稿の原文は平明な英文である。しかし、原文が平明であるからといって、それを自然で達意な日本語に移すことが容易であるとは限らない。今回もまた翻訳の難かしさをしじみと感じた。誤訳、不適訳も多々あることであろう。御教示を願いたい。

なお、原文がイタリック体になっている所は、本稿では傍点を施した。

マルクス主義者と民族問題

本稿の目的は、民族問題に関するマルクス主義者の古典的な論争の中心をなす理論的・方法的局面を折出してみせるところにある。この論争は、マルクス、エンゲルス自身によって、その著作の中で展開されたかなり不正確な見解を出発点とし、第一次世界大戦前の第二インターナショナルの中で精力的に続けられ、レーニンの民族自決権という現実的で革命的な理論的定式化によって頂点に達したものである。

マルクスとエンゲルス 民族性と国際主義

マルクスは、民族問題に関する体系的な理論も、「民族」の概念の正確な定義も、この領域におけるプロレタリアートのための普遍的な政治的戦略をも提出しなかった。この問題に関する

る彼の論説は、たいていの場合、特殊なケースについての具体的な政治的表明にすぎなかった。本来の「理論的な」テキストに関していえば、最もよく知られ、最も影響力のあるものは、疑いもなく『宣言』の中にみられる共産主義者と民族に関するむしろなぞのような数節である。これらの数節は、プロレタリア運動の国際主義的性格を、断固たる明確な方法で宣言したという歴史的価値を持っている。だが、それらは、ある種の経済主義と、驚ろく程の自由貿易主義者のオブティミズムから必ずしも解放されていなかった。このことは、勝利したプロレタリアートは、ただ単に、「ブルジョアジー、自由貿易、世界市場の発展」等々によって始められた民族的敵対廃止の仕事をさらに続行しさえすればよいというサゼスチョンの中に特にはっきりと見てとることができるとは、しかしながら、この考え方は、この時期の他の著述の中にみられる考え方は矛盾している。他の著述の中でマルクスは、「各々の民族のブルジョアジーが、依然として個々の民族的利害にしがみついているのに、大工業は、あらゆる民族を通じて共通の利害をもち、⁽¹⁾ここでは民族性もすでに死滅しているような一階級を作り出した」と強調していた。後の著作（特にアイルランド問題に関する著作）の中で、マルクスは、ブルジョアジーは、単に民族的敵対をはくむ傾向があるだけでなく、実際にそれを増大させる傾向がある、なぜならば、1、市場を支配するための闘争が、資本主義列強の間にはたかいたかを生み出すからであり、2、ある民族の他民族に

よる搾取は、民族的敵対を生み出すからであり、3、ショーヴイニズムは、ブルジョアジーをしてプロレタリアートに対する支配を持続せしめうるイデオロギー的道具の一つであるからである、ということを示した。

マルクスは、しっかりした根拠にもとづいて、資本主義の様式による経済の国際化、すなわち、「民族の普遍的な相互依存」を作り出すことによって「産業の民族的基盤を破壊してきた」ところの世界市場の出現を強調した。だが、「工業生産の標準化と生活条件の均質化」が、民族的分離（孤立）と敵対を解消するのに役立つという彼の考え方には一定の経済主義的傾向があった。それによれば、民族的差異は、簡単に生産過程における差異と同一視されるかのようにであった。

マルクスの有名な「プロレタリアートに祖国なし」という皮肉で挑発的な命題に関して言えば、これは、何よりもまず、あらゆる民族のプロレタリアートは、共通の利益を持っているという意味に解釈されなければならない。そして、この事実は、マルクスからみれば、民族性の廃止と傾向的に同じことに見えた（上に引用した『ドイツ・イデオロギー』からの一節をみよ）のであった。それゆえ、プロレタリアートにとっては、民族とは、単に権力掌握のための直接的な政治的枠組み以外の何ものでもないということになる。だが、マルクスの反愛国主

義は、より深い意味を持っていた。すなわち、1、プロレタリア・ヒューマニズムにとつては、人類全体が意味のある総体なのであり、最高の価値であり、最終的目標である、という点と、2、史的唯物論からみれば、共産主義は民族国家の狭い枠組をのりこえる生産力の巨大な発展によって全世界的な規模においてのみ確立される、という点である。

『共産党宣言』は、プロレタリア・インターナショナリズムの基礎をおくことはしたのであるが、民族問題に関する具体的な政治的戦略についてはほとんどいかなる指示も与えなかった。そのような戦略は、特にポーランドやアイルランドに関するマルクスの著作の中で後に発展させられることになった（同様に、このことは、彼がインターナショナルの中で、マッツィーニの自由民主主義的民族主義とブルードン主義者の民族ニヒリズムに対して行なった闘争のなかでもなされた）。ポーランドの民族解放闘争に対する支持は、十九世紀の民主主義的労働運動の伝統であった。マルクスとエンゲルスもまたこの伝統に属してはいたけれども、この両人がポーランドを支持したのは、民族自決という普遍的な民主主義的原理の名に於てであるよりもむしろ、ポーランド人のたたかいが、ヨーロッパにおける主要な反動の保塁にして科学的社会主義の創始者たちの最も嫌いなツァーリズム・ロシアにむけられているからであった。このアプローチは、ある種のあいまいさを含んでいた。すなわち、もしその民族闘争が反ツァーリズム闘争でもあるという理

由のみポーランドが支持されるべきであるとするならば、このことは、親ロシア的スラヴ人（チェック人のような）は、自決の権利を持たないということの意味するのであるうかという点である。これがまさにエンゲルスが、一八四八―一九年にとりくんだ問題であった。

他方、アイルランドに関する著述は、はるかに広い適用範囲を持っており、暗黙のうちには、被抑圧民族の問題に関するいくつかの普遍的原理を述べていた。初期にはマルクスは、アイルランドが大ブリテンとの連邦の中で自治を持つことに賛成し、（イギリス人の大地主による）アイルランド人の抑圧は、イギリスにおける労働者階級（チャーチスト）の勝利によってのみ解決されると信じていた。これに反して、六〇年代には、彼はアイルランドの解放をイギリス・プロレタリアートの解放のための条件とみなした。この時期におけるアイルランドに関する彼の著述は、プロレタリア・インターナショナリズムとの弁証法的関連の中でマルクス主義者の民族自決論を将来一層発展させていくために重要となるはずの三つのテーマを苦心して仕上げたものであった。すなわち、1、被抑圧民族の民族的解放のみが、民族的分離や敵対を克服することを可能にし、さらに、両民族の労働者階級が、彼らの共通の敵、資本家に逆らって団結することを可能にするのである。2、他民族の抑圧は、抑圧民族の労働者に対するブルジョアジーのイデオロギー的へ

ゲモノーを強化するのに役立つのである。「他民族を抑圧する民族は、みずからの鉄鎖をきたえる」。3、被抑圧民族の解放は、抑圧民族側の支配階級の経済的・政治的・軍事的・イデオロギー的基盤を弱め、このことは、当該民族の労働者階級の革命闘争に役立つのである。

エンゲルス

ポーランドおよびアイルランドに関するエンゲルスの立場は、マルクスのそれとほぼ同じものであった。しかしながら、彼の著作の中には奇妙な理論的概念、すなわち「非歴史的民族」の教義が見出される。だが、この教義は——私の見るところ根本的にマルクス主義とは無縁のものであるが——たとえ人がどれほど革命的社会主義者として民主主義的立場に立っていたにしても、民族問題に関してどれほどの誤りを犯しうるかを示す極端な実例として十分検討するに値するものである。

一八四八—九年に、中部ヨーロッパの民主主義革命の失敗を分析して、エンゲルスは、その原因を南スラヴ諸民族（チェック人、スロヴァキア人、クロアチア人、セルビア人、ルーマニア人、スロヴェニア人、ダルマチア人、モラヴィア人、ルテニア人等々）の演じた反革命的役割に帰せしめた。これら諸民族は、大挙してオーストリア、ロシア両帝国の軍隊に入隊し、反動勢力によって、ハンガリー、ポーランド、オーストリア、イタリアの自由主義革命を圧殺するために使われた、というので

あった。

事実、オーストリア帝国の軍隊は、スラヴ人とドイツ・オーストリア人の農民からなっていた。反革命の勝利は、一つの重要な要因によって可能となったのであった。すなわち、革命のブルジョア自由主義的指導部が、民族的土地革命を発火させるには、あまりに不決断であり、あまりに「穏健」であり、あまりに恐怖心にとりつかれていたからであった。したがって、それは、農民大衆と民族的少数派を自分の側に獲得することができず、彼らが反動の盲目的な道具となることを防ぐこともできなかったのである。一八四八年革命は、土地問題と民族問題（まさにこの問題は、一九一七年の十月革命が成功裡に解決したことであるが）に根本的な解決を与えることができなかったがゆえに失敗した革命の古典的な実例である。この失敗は、指導部の社会的基盤の狭さから生じたものであった。つまり、中部ヨーロッパの自由主義的ブルジョアジーは、十九世紀にはもはや重要な革命的階級ではなくなっていたのである。

エンゲルスは、一八四八—九年の失敗の真の階級的、原因を把握することができなかったもので、それを形而上学的なイデオロギー、すなわち、本来的に反革命的な「非歴史的民族」——このカテゴリーの中に、彼は南スラヴ人、ブリタニー人、スコットランド人、バスク人をごちゃ混ぜに入れていた——の理論を

用いて説明しようと試みた。エンゲルスによれば、「ヘーゲルのいうように、歴史の過程によって無慈悲に押しつぶされたこれらの民族の名残り、この民族的残存物は、つねに反革命の狂信的な担い手であり、完全に根絶されるか、非民族化されるまではいつまでもそうなのであり、その全存在がすでに偉大な歴史的革命にたいする一つの抗議なのである」という。この理論の創始者であるヘーゲルは、国家を作ること成功しなかった、あるいは、その国家がずっと以前に破壊されてしまった民族は、「非歴史的」で、滅亡すべく運命づけられていると主張していた。例として、彼はまさに南スラヴ族——ブルガリア人、セルビア人等々——をあげた。エンゲルスは、この偽歴史的・形而上学的議論を、一八五五年の論説の中で発展させた。そこではこう述べられていた。「パン・スラヴ主義は、一千年の歴史が作り上げてきたものを一掃してしまおうと試みる一つの運動であり、トルコ、ハンガリー、ドイツの半分をヨーロッパの地図から抹消することなしにはその目的が達成されえない運動である」⁽⁴⁾。このような主張が、史的唯物論の革命的理念よりも、歴史法学派（サビーニ等）の保守的原理の方により多くを負っていることをここでつけ加える必要はないであろう。逆説的なことであるが、同じエンゲルスは、同じ時期（一八五三年）の一論説の中で、トルコ帝国はバルカン諸民族の解放の結果として解体すべく運命づけられていると強調していた。だが、この事実は決して彼を驚かせないものであった。なんと

れば、彼は、すぐれた弁証法家として、歴史の中に「人類史における永遠の変化……すべては変化すること以外になにひとつ不変なものはなく、すべては運動すること以外になにひとつ不動なものはない」ということを認めていたからである。

一八六六年のポーランドに関する一連の論説の中で、エンゲルスのイデオロギーの一貫性が証明された。彼は、民族的統一と独立のための権利がみとめられる「ヨーロッパの歴史的大民族」（イタリア、ポーランド、ハンガリー、ドイツ）と、「ヨーロッパの重要性」を持たず、「民族的生命力」をもたない「多くの民族の痕跡」（ルーマニア人、セルビア人、チェック人、スロヴァキア人、等々）——彼らは、ツァーリとナポレオンⅢ世の手に握られた道具にすぎない——とを対比した。だが、これらの主張はいずれも新聞記事によるものであり、科学的著作の厳密さを欠き、彼の本来の理論的著作とはちがった立場に立っているとして、エンゲルスのために弁護することもできるかもしれない。さらに、エンゲルスの立場の基本は、ツァーリズムとオーストリア帝国をいかにして打ち破るかという民主主義的で革命的なものであった。彼の動機は、決して何らかの種類のスラヴ恐怖症によるものではなかった。一八四八年革命以前に書かれた一論説の中で、彼は「イタリア人とスラヴ人の解放の途上に横たわるすべてのじゃまものを一掃」⁽⁵⁾するために、オ

1 ストリア帝国を敗北させるべきだと主張していた。エンゲルスは、ドイツ・シヨヴィニズムにとりつかれていたわけでもなかった。このことは、「外国のまん中で不合理な民族性を頑強に保持しつづけている」ハンガリー内のドイツ人少数者（ジベンビュルクのザクセン人）に対する彼の攻撃によって証明される。⁽⁸⁾

民族分離主義に反対する急進左派

ルクセンブルク、パンネクック、トロツキー（一九一七年以前）、シュトラッサーによって代表される「急進左派」の潮流（左翼急進派）は、程度の差もあり、時には形態も非常に異なっていたけれども、プロレタリア・インターナショナル主義の原理の名において、民族分離主義に反対することによって特徴づけられる。さらに、民族問題に対する姿勢が、この潮流とレニンとの間の主要な相違点の一つであった。この両者は、マルクス主義に対する姿勢と革命的アプローチという点に関しては大変接近していたのであるが。

ローザ・ルクセンブルク

一八九三年に、ローザ・ルクセンブルクは、ポーランド王国社会民主党（SDKP）を創設した。この党は、マルクス主義的、国際主義的綱領を持ち、ポーランド独立のためにたたかうことを目的とするポーランド社会党（PPS）に対抗するもの

であった。社会愛国主義的政党としてPPS（いくつかの正しい面もあった）を公然と非難して、ローザとSDKPの彼女の仲間たちは、ポーランド独立のスローガンに断固として反対し、逆に、ロシアとポーランドのプロレタリアートの緊密な連帯と共通の運命を強調した。「ポーランド王国」（ツァーリ帝国に併合されたポーランドの部分）は、独立の方向へではなく、未来のロシア民主共和国の枠組の中で地域的自治をみとめられる方向に進むべきである、と彼らは主張した。

一八九六年に、ルクセンブルクは、第二インターナショナルの大会でSDKPを代表した。この会議で彼女が主張した立場は、次の言葉の中にはっきりと表明されている。⁽⁹⁾ すなわち、ポーランドの解放は、チェコスロバキア、アイルランド、アルサス・ロレーヌの解放と同じようにユートピアである……プロレタリアートの統一した政治闘争が、「一連の不毛な民族闘争」によっておきかえられるべきではない、という言葉に。この立場の理論的基礎は、後に学位論文『ポーランドの産業的發展』⁽¹⁰⁾（一八九八）のために彼女がなした研究によって提供されることになった。この著作の中心的なテーマは、経済的観点からみれば、ポーランドはすでにロシアに統合されているというところにあった。ポーランド工業の成長は、ロシア市場のおかげで実現されたものであり、したがって、ポーランド経済はもはやロシア経済からはなれては存在しえない。ポーランド独立は、

封建ポーランド貴族の熱望であったが、今や工業的發展が、この熱望の基礎を掘りくずしている。その経済的未來がロシア經濟にかかっているポーランド・ブルジョアジーも、その歴史的利益が、ロシア・プロレタリアートとの革命的連帯にあるポーランド・プロレタリアートともに民族主義者ではない。わずかにプチ・ブルジョアジーと前資本主義諸階層のみが、なお統一した独立ポーランドというユートピア的な夢をなつかしがつているだけである。この点で、ルクセンブルクは、自分のこの本をロシア人民主義者のユートピア的・逆行的熱望の批判にむけて書かれたレーニンの『ロシアにおける資本主義の發達』のポーランド版と考えていた。

民族問題に関する彼女の最も論争をよんだ著述（特にレーニンが攻撃した）は、ポーランド社会民主党（リトアニアのマルクス主義グループが参加したのちSDKPIIになった）の雑誌に『民族問題と自治』というタイトルで、一九〇八年に公表された一連の論説であった。この論説の中で提出された主要な——最も論争になった——観念は、次のようなものであった。

1、自決の権利は、抽象的で形而上学的な権利であって、ちょうど十九世紀の空想主義者が主張したいいわゆる「労働の権利」や、作家チェルヌイシエフスキーの宣言する「すべての人間が黄金の皿から食べる権利」といった笑うべき権利と同様なものである。2、各民族の分離の権利を支持することは、実際に

は、ブルジョア・ナショナリズムを支持することを意味する。なんとなれば、一樣な均質の実在としての民族は存在せず——各民族の各々の階級が相たたかう利害と「権利」を持っているからである。3、一般に小民族の独立、特殊にポーランドの独立は、経済的視点からみてユートピアであり、歴史法則によって敗北すべく運命づけられている。ルクセンブルクにとって、この法則に対するたった一つの例外があった。トルコ帝国のバルカン諸民族（ギリシア人、セルビア人、ブルガリア人、アルメニア人）であった。これらの諸民族は、トルコにまさる経済的・社会的・文化的發展段階に達しており、一方トルコは、その死の重みをもってこれらの諸民族を圧迫しているすでに衰退しつつある帝国であった。一八九六年（クレタ島のギリシア人の民族蜂起に觸発されて）から、ルクセンブルクは、——クリミア戦争時にマルクスによって主張された立場に反対して——トルコ帝国はもはや生命力をもたず、民族国家へ解体することが歴史の進歩にとって必然であると考えるようになった。

少数民族には未來がないという彼女の見解をバックアップするものとして、ルクセンブルクは、「非歴史的民族」に関するエンゲルスの論説を使った（彼女は、これらの論説をマルクスのものとしているが、それは、これらの論説の眞の著者が誰であるかは、未公開マルクス・エンゲルス書簡の発見によって、一九一三年になって始めて確認されたからである）。とりわけ、

彼女はハンガリー人の闘争に関する一八四九年一月の論説を使い、「歴史の進展によって無慈悲にふみつぶされた一民族の名残り」という我々がすでに言及した一節を引用した。彼女は南スラヴ族に対するエンゲルスの見解は誤りであるとみとめたが、しかし、彼の方法は正しいと信じ、民族の権利という形而上学的イデオロギーに対して彼が示した軽蔑と、彼の「あらゆるセンチメンタリズムから解放された冷静なりアリズム」とを賞賛した。⁽¹⁸⁾

よく知られているように、一九一四年に、ルクセンブルクは、戦争の勃発とともにヨーロッパをのみつくした社会愛国主義の巨大な波に屈服しなかった社会主義インターナショナルの数少ない指導者の一人であった。その国際主義的・反軍国主義的プロバガンダのゆえに、ドイツ官憲によって投獄されていた時、一九一五年に、彼女は有名な『ユニウスの小冊子』を書き、こっそりと獄外に持ち出した。このテキストで、ルクセンブルクは、ある程度まで自決の原理を採用した。「社会主義は、すべての人民に独立の権利を与え、自分自身の運命を独立してコントロールする自由を与える⁽¹⁹⁾」と彼女は述べた。だが、彼女にとって、この自決は、現存資本主義、とりわけ植民地国内部では実現されえないものであった。フランス、トルコ、ツァーリスト・ロシアのような帝国主義国に関して、どうして「自由な選択」について語る事ができようか。帝国主義の時

代においては、「民族的利益」のため闘争は、巨大な植民地列強にとってだけでなく、「大国の帝国主義的将棋盤の上の歩にすぎない⁽²⁰⁾」小民族にとっても一つの欺瞞である。

一八九三年から一九一七年の間に展開された民族問題に関するルクセンブルクの理論は、四つの基本的な理論的・方法的・政治的誤りにもとづいていた。

1、とりわけ一九一四年以前には、彼女はこの問題に対して経済主義的アプローチをとっていた。ポーランドはロシアに経済的に依存している。それゆえ政治的に独立しえない——これは、両国の政治状況の特殊性や相対的な個別性を無視する傾向のある議論であった。この経済決定論的方法は、彼女の学位論文とポーランド問題に関する初期の著作に特に顕著である。ロシア市場と結びついたポーランドの産業的発展は、「歴史的必然性の鉄の力をもって」（同じタイプの他の表現である「自然法則の不可避性」とともにルクセンブルクがこの時期しばしば用いた表現）、一方で、ポーランド独立のユートピア的性格を、他方で、ロシアとポーランドのプロレタリアートの連帯を決定しているのである、と彼女はいう。このように政治を経済に無媒介に同化する特徴的な実例は、彼女が一九〇二年に社会愛国主義に関して書いた論説の中にみられる。そこでは、ポーランドにおける経済的傾向——「それゆえに」政治的傾向——は、ロシアとの同盟に賛成である、と強調されている。この「それ

ゆえに」という一句は、媒介の欠如の表現であり、証明ぬきで、ただ自明なこととして前提されていることを示すものである。⁽¹⁵⁾だが、このタイプの議論は、ルクセンブルクが経済的おとしあなを避けることにますます成功するようになるにつれて消滅しはじめた。とくに、一九一四年以後、彼女が「社会主義か野蠻か」(『ユニウスの小冊子』)という一句を作り出したのちそうなった。この言葉は、宿命論的なカウツキー型経済主義との根本的な方法的決別を示すものであった。『ユニウスの小冊子』にみられる民族問題に関する彼女の主張は、本質的に政治的なものであり、いかなる機械論的先入観にもとづくものでもなかった。

2、ルクセンブルクにとって、民族とは本質的に文化的現象であった。このことがまた、単に経済やイデオロギーと同一視されるべきではなく、その具体的形態が、独立した民族国家(あるいはそれを樹立するための闘争)である政治的次元を軽視する傾向をもたらした。このことは、ルクセンブルクが、民族的抑圧の廃止と「自由な文化的発展」の保障に対して好意的であったのに、分離主義や政治的独立の権利はみとめようとしなかった理由である。彼女は、独立した民族国家を形成する権利を否定することが、まさに民族的抑圧の主要な形態の一つであることを理解しなかった。

3、ルクセンブルクは、民族解放運動の時代錯誤的・ブチアブルジョア的・反動的側面のみをみて、ツァーリズムに対する(後

には、帝国主義や植民地主義に対する)この運動の革命的潜在力をみなかった。いいかえれば、彼女は、これらの民族運動の二面性という錯綜した、矛盾した弁証法を理解しなかった。ロシアに関していえば、一般に、彼女は、労働者階級の非プロレタリア的同盟者、すなわち農民層と被抑圧諸民族の革命的役割を過少評価していた。彼女は、ロシア革命を純粹に労働者階級によるものとみて、——レーニンのように——プロレタリアートによって指導されたものとはみなかった。⁽¹⁶⁾

4、彼女は、被抑圧民族の民族解放が、ただ単に「ユートピア的」・「反動的」・「前資本主義的」ブチ・ブルジョアジーの要求であるだけでなく、プロレタリアートをも含む大衆全体の要求でもあること、したがって、ロシア・プロレタリアートによる民族自決権の承認は、被抑圧民族のプロレタリアートとの連帯のための不可欠の条件であることを理解しなかった。

このような誤り、矛盾、欠陥の源泉は何であろうか？ それらが、論理的にルクセンブルクの方法(一九一四年以前の経済主義を別とすれば)や、あるいは全体としての彼女の政治的立場(たとえば、党や民主主義等々に関する)に結びついていると考えることは誤りであろう。実際、民族問題に関するこれらの理論は、なんらルクセンブルクに特有のものではなく、SD K P I Lの他の指導者たちによって、特に、ジェルジンスキーのようなボルシェヴィキを支持した人々によってさえ共有され

ていたものであった。ルクセンブルクの一面的な立場は、つまるところ、PPSに対するSDKPiLの執拗な、緊張した激しいイデオロギー闘争のイデオロギー的副産物であったというところが、もつともありそうなところであろう。

したがって、レーニンとルクセンブルクのちがいは、ある程度まで（少なくともポーランドに関しては）、ロシアの国際主義者（大ロシア・ショーヴィニズムをうちやぶるために苦闘している）と、ポーランドの国際主義者（ポーランドの社会愛国主義と格闘している）の間の立場のちがいに由来するものであった。一時レーニンは、この問題に関するロシアとポーランドのマルクス主義者の間の一定の「分業」を認めていたようにみえた。これを認めた時の、彼のルクセンブルクに対する主要な批判点は、彼女が、ある特殊な状況（特殊な歴史的位位置にあるポーランド）を普遍化し、単にポーランド独立だけでなく、あらゆる他の被抑圧小民族の独立をも否定しようとしているところにあった。

しかしながら、ある論説の中で、ルクセンブルクは、レーニンのそれと大変よく似た言葉でこの問題を語った。それは、一九〇五年の論文集『ポーランド問題と社会主義運動』⁽¹⁸⁾によせた序文においてであった。このエッセイにおいて、ルクセンブルクは、「社会主義の基本的原理に由来する」あらゆる民族の

独立への否定しえない権利——彼女はそれをみとめた——と、彼女の否定するポーランド独立の望ましき間に注意深い区別を設けた。これはまた、彼女が民族感情（それは単に「文化的」現象として取扱われているにすぎないが）の重要性、深さ、さらには正当性さえをもみとめ、民族的抑圧は「その野蛮さにおいて最も耐えがたい抑圧」であり、「敵意と反抗」をひきおこすだけであると強調した数少ない著作の一つでもある。この著作は、『ユニウス・パンフレット』の中の数行とともに、ルクセンブルク思想が、語の革命的な意味においてきわめて現実的であり、形而上学的で固定した性格をもつ直線のような首尾一貫性しかもたなかったとはとうてい言いえないことを物語るものである。

トロツキー

民族問題に関する一九一七年以前のトロツキーの著作は、「折衷的」（レーニンが彼を批判するのに用いた語）として特色づけられる。彼はルクセンブルクとレーニンの中間に位置していた。トロツキーが、民族問題に関心をもつようになったのは、とりわけ一九一四年以後のことであった。彼は、この問題を、パンフレット『戦争とインターナショナル』（一九一四）——社会愛国主義にむけた論争的著作——において、二つの異なった立場——もし相互に矛盾してはいないとすれば——からとりあげた。

1、歴史的・経済的・政治的・文化的。世界は、世界経済の方向にむかう生産力と民族国家の狭い枠組との間の矛盾の産物であった。それゆえ、トロツキーは、「独立した経済的存在としての民族国家の滅亡」を予言した——これは、厳密に経済的見地からすれば全く正しい主張であった。だが、彼は、この前提から、民族国家全体の「崩壊」と「滅亡」を結論した。民族国家そのもの、民族という概念自体は、未来において、「文化的・イデオロギー的・心理学的現象」としてのみ存在することができるのである。と彼は述べた。もちろん、これは明らかに不合理な推論である。民族国家の経済的独立の終焉は、決して政治的存在としての民族国家の消滅と同義語ではない。ルクセンブルクと同様、トロツキーもまた、民族を経済か文化に還元する傾向があった。かくして、彼は、この問題の政治的側面、すなわち、経済的・イデオロギー的領域とは別の政治的現象としての民族国家（もちろん、両者と媒介的關係を持つてはいるが）という側面を見失ってしまったのである。

2、具体的な政治的・外交的・文化的。ルクセンブルクとちがって、トロツキーは、彼が「外交官の平和」と対比したところの「民族間の平和」のための条件の一つとして民族自決権をはっきりと宣言した。そのうえ、彼は、統一した独立ポーランド（つまり、ツァーリ、オーストリア、ドイツの支配から解放された）の実現可能性と、ハンガリー、ルーマニア、ブルガリ

ア、セルビア、ボヘミア等々の独立を支持した。これら諸民族の解放とバルカン連邦への彼らの結集こそが、ヨーロッパへ進出しようとするツァーリズムを阻止する最善の防壁になるだろうと彼はみた。さらに、注目すべき洞察力をもって、トロツキーは、プロレタリア・インターナショナリズムと民族的権利の間の弁証法的關係を証明した。彼のいうところによれば、社会愛国主義者によるインターナショナルの破壊は、単に社会主義に対する犯罪であるだけでなく、「その最も広い、正しい意味における民族的利益」に対する犯罪でもあった。なぜならば、この破壊は、ヨーロッパを民主主義的原理と諸民族の自決権の基礎の上にもう一度再建しうる唯一の力を解体させてしまったからである、というわけであった。

一九一五年の一連の論説（『民族と経済』²⁰）の中で、トロツキーは、民族問題をより正確な仕方で定義しようと試みた。しかし、なおいくらかのあいまいさがなくてはなかつた。彼の主張の矛盾した方向は、彼の思考がまだ結晶していないことを示すものであった。彼は、市場や生産力の拡大の必要から、自分たちの政治的立場を正当化している社会帝国主義者にたいする論争から始めた。この論争は、方法的見地からすれば、経済主義を拒否しているようにみえた。そうだが、マルクス主義者は、経済領域の可能性なきがら大きな拡大に賛成する、しかし、労働運動の分裂、解体、弱さをまねかない限りにおいてであ

る、と彼は述べた。トロツキーの主張は、彼が労働者の運動は「近代社会における最も重要な生産力」であると書き、それにもかかわらず、政治的、規準の重要性を無視することを断言しよるとした時、いくらか混乱していた。しかしながら、二つの論説を通じて、彼は「経済発展の中央集権化への要求」にたちもどった。これが、生産力の発展の妨害物としての民族国家を破壊することを要求するというわけである。これらの「要求」と、トロツキーもまた認めていた民族自決権とはどのように両立しうるであろうか。彼は、みずからを経済主義へと再びつれもどした理論的とんぼ返りによってこのディレンマから逃れた。すなわちいう。「国家は、本質的に経済的組織である。国家は経済的発展の必要に適應させられるであろう」。したがって、民族国家は「共和政のヨーロッパ合衆国」に解消されるであろう。他方、経済と絶縁し、国家の古い枠組から解放された民族は、「文化的発展」の領域において……自決権を持つてであろう。

一九一七年に、トロツキーは、このような「折衷的な」立場をすてて、民族問題に関するレーニン主義者の立場を採用した。そして、この立場を、彼は、ブレスト・リトフスクにおいて外務人民委員として立派に防衛したのであった。⁽²¹⁾

パンネクックとシュトラッサー

パンネクックの『階級闘争と民族』およびシュトラッサーの

『労働者と民族』は、ともに一九一二年にライヘンベルク（ボヘミア）で出版された。⁽²²⁾ 両者とも、オットー・バウアーのテーゼに対する国際主義者の回答であった。双方の著者に共通する中心的な思想は、民族的利益に対する階級的利益の優位であり、その実際の結論は、オーストリア社会民主党の統一を保持し、この党を別々の自治的な民族部門に分離することを拒否することであった。両者とも民族を宗教になぞらえ、社会主義の実現とともに消え去る運命であるイデオロギーとしてとらえ、バウアーの民族問題に関する教義を、非歴史的、観念的な民族日和見主義として拒否した。

パンネクックにとつては、「民族的現象は、ブルジョア・イデオロギー的現象であった」。このイデオロギーが、独立した力でありうるというバウアーの信念は、カント主義者に特徴的なものであり、唯物論者の方法ではなかった。しかしながら、興味あることは、パンネクックもシュトラッサーもともに、その本質において、バウアーとオーストリア社会民主党の民族綱領、すなわち、多民族のオーストリア・ハンガリー国家の枠内における民族自治を受け入れたことであった。さらに、パンネクックは、これが地域原理ではなく、個人原理にもとづく自治であることを強調した。そして、この考えは、純粹にイデオロギー的・文化的なものとしての民族現象という彼の観念と両立するものであった。パンネクックとシュトラッサーが、バウアー

一とはちがつて、この綱領が資本主義の枠内で実現されうるとは考えず、それに純粹にプロバガンダ的・教育的価値を割り当てていたにすぎないというのはたしかである。

経済主義は、この二人の著者の共通の基本的前提の中に間接的にあらわれている。階級的利害の民族的利害に対する優位は、前者の経済的基盤によるものであった。彼のパンフレットの非常に面白い一節において、シュトラッサーは、よきドイツ系オーストリア人の愛国者といえども、ドイツ人の店よりも、チェック人の所有の店の方がより安い場合には、そちらの店の方で買物をするであろうと述べた。だが、このことは、本当にシュトラッサーが述べたように、民族的利害と経済的利害が衝突した場合には、経済的利害が勝をしめると人にいわしめるに十分な根拠となるであろうか。パウアーに対するパンネクックとシュトラッサーの論争は、革命的な展望の中にはめこまれたが、しかし不完全なものであった。オーストロ・マルクス主義の民族改良政策にそのままインターナショナルリズムを対置することにみずからを局限して、民族問題、とくに被抑圧民族の闘争という実際の領域において選択すべき具体的な政治的アプローチを提出することができない程にまでそうであった。

オーストロ・マルクス主義中央と文化的自治

オーストロ・マルクス主義者の主要なアイデアは、全面的な

文化的・行政的・法的権限をもつ公的な法律上の自治体へ諸民族を編成しなおすことによって多民族国家の枠内で文化的自治を実現することであった。民族問題に関しては、他のあらゆる政治問題に関してと同様、彼らの教義は、改良と革命、民族主義と国際主義の中間、すなわち「中央主義」として特色づけられた。彼らは、民族的少数者の権利を認めること、同時に、オーストリア・ハンガリー帝国の統一を保持することの双方を望んだ。急進左派と同じように、彼らもまた民族問題の解決策としての分離主義を拒否する傾向があったが、オーストロ・マルクス主義者の場合には、他の理由のゆえにそうしたというよりも、ほとんど正反対の立場からそうしたのであった。

カール・レンナー

一九一七年以前に、オーストリアの未来の首相（一九一八二〇）は、民族問題に関するいくつかの研究を公刊した。その中で、最初の最もよく知られている著作は『国家と民族』（一八九九）である。彼の方法は、根本において、法学的・憲法学的なものであり、彼の国家概念も、マルクスというよりはラッサールの方により共通点を持っていた（メーリンク、カウツキー、ブルジョア法律家ハンス・ケルゼンによって正しく指摘されたように）。ラッサールの国家統制の影響は、彼の初期の著作にさえ暗に含まれていたが、一九一四年以後、たとえば『マルクス主義、戦争、インターナショナル』（一九一七）と

いう著作の中ですすますます明らかになった。この著作には、次のような理念が含まれていた（マルクス主義との関連でみれば、これらの理念はいくらか問題のあるものであった）。1、「経済は、ますます排他的に資本家階級に奉仕するようになるが、他方国家は、ますますプロレタリアートに奉仕するようになる」。2、「社会主義の萌芽は、今日、資本主義国家のあらゆる制度の中に見出される」。

民族問題に関するレンナーの立場は、この「社会的—国家的統制」の光に照らして理解されなければならない。彼の本来のねらいは、「帝国の解体」と「オーストリアの分解」を阻止すること、すなわち「史上有名なオーストリア国家」を救うことであった。それゆえ、オーストリア—ハンガリー帝国は、レンナーの政治思想の基本的枠組として、一定の民主的改革と民族的少数者への譲歩（文化的、法的等々の）はあるが、それを通じて保持されるべき枠組としてあらわれた。逆説的なことであるが、民族問題を非政治化し、行政的・憲法的问题にし、法律問題に変えようとしたのは、この国家統制のゆえであった。彼は、政治的分離主義の危険と多民族国家の崩壊の危険を、精密で複雑な法制度上の機構——個人原理に立つ民族自治体、民族性を選択したすべての人々を記録する「民族台帳」、各民族少数者のための別々の選挙名簿、行政的自治をもつ地域的・民族的団体、あるいはその一方の団体等々——によって無力化しよう

と試みた。実際、レンナーの立場は、その著者の主張にもかかわらず、いかなる階級の見通しも革命的方向も欠いており、大部分マルクス主義の政治的・理論的領域の外にあるものであった。

オットー・パウアー

パウアーの大著『民族問題と社会民主党』（一九〇七）は、レンナーの著作よりもかなり大きな理論上の重要性と影響力をもった。だが、パウアーもまた、オーストロ・マルクス主義の基本的前提、すなわち、多民族国家の保全という前提をレンナーと共有していた。パウアーは、民族問題の解決を、オーストリア—ハンガリー帝国の諸制度の進歩的操作というような改良主義的な言いまわし（「民族的進化」というのが、彼が自分の戦略を記述するのに用いた言葉であった）であらわした。「民族自治が、重大な決定や大胆な行動の結果実現される」ということはほとんどありそうにないことである。前進の長い過程、困難な闘争を通じて……オーストリアは一步一步民族自治の方向に進んでいくであろう。新しい憲法は、偉大な立法行為によってではなく、一連の地方的な法律によって作られることになるであろう」。

パウアーの分析に特徴的なものは、民族問題に関する彼の理論の心理的—文化的性格であり、それは心理的用語——「目的

の多様性、同じ刺激が異なった運動をひきおこし、同じ外的状況が異なった決定を導くという事実——で定義された「民族的性格」というぼんやりした神秘的な概念の基礎の上に構築されたものであった。事実、この概念は、純粹に形而上学的なものであって、新カント派起源のものであった。これが、パウアーのマルクス主義的反对者（カウツキー、パンネクック、シュトラッサー、等々）によって厳しく批判されたのは何ら驚ろくに値しない。

パウアーの理論的建造物の第二のキイ概念は、もちろん、民族自治の全戦略の基礎である民族文化であった。分析を文化のレベルにおくことは、当然政治問題、すなわち民族国家の創設による自決の無視に導く。この意味で、パウアーの「文化主義」は、レンナーの「法律主義」と同じ方法的役割を演じた。すなわち、それは民族問題を非政治化した。

さらに、パウアーは、民族文化の領域から、階級と階級闘争をほとんど完全にしめ出してしまった。彼の綱領のねらいは、「文化的利益」と「民族文化共同体」への通路を労働者階級に与えることであった。彼によれば、労働者階級は資本主義によって、この「民族文化共同体」からしめ出されているというのであった。したがって、彼は、「文化的価値」を絶対的に中立的なものであって、階級的内容を欠いたものであると考えてい

たようにみえた。かくして、彼は、文化世界の相対的自律を無視し、文化世界を直接に社会的基盤に還元（「ブルジョア文化」対「プロレタリア文化」）しようと望み「プロレタリア教」の信奉者とは反対の誤りを犯すことになった。そんなわけで、パウアーに対する論争において、パンネクックが、プロレタリアートは、ゲテやシラー（あるいはフライリヒタートやハイネ）の中に、ブルジョアジーとは非常にちがったものを読むと強調することはかたんなることであった。ブルジョア文化の遺産に対するプロレタリアートの複雑な関係、アウフヘーブングの弁証法的関係（保持—否定—超越）は、パウアーによって、単なる充當、あるいはむしろ受動的受容にまでおとしめられてしまった。民族問題を定義するに際して、文化の決定的重要性を強調した点で、パウアーは、まぎれもなく正しかったが、彼の理論は、民族文化の眞の物神化をもたらした。その最も顕著な表現は、社会主義は民族間の文化的差異を増大させるという思想であった。⁽²⁸⁾

社会主義と労働運動を「民族化する」傾向、幼年期のプロレタリアートについて「生来のコスモポリタニズム」と呼んだものの拒否、国際社会主義文化を思いつく能力の欠如、こういったことによって、パウアーの理論は、みずから打破しようとする指した民族イデオロギーによって、ある程度まで汚染されることになった。かくして、パウアーの理論が、オーストリアハ

ンガリーにおいてのみならず、ロシア帝国（ブント、コーカサス社会民主党、等々）その他においても、労働運動の「民族的」潮流の教義になったのは、何ら驚ろくに値しない。しかしながら、これらの限界にもかかわらず、バウアーの著作は、否定しえない理論的価値をもっていた。とりわけ、その方法の歴史主義的性格においてそうである。共通の歴史的運命（その物質的基礎は、自然に対する人間の闘争である）の産物としての民族、「たえざる過程の完成することのない結果」としての民族、過去の出来事の結晶化、「凍れる歴史の断片」としての民族という定義において、バウアーはしっかりと史的唯物論の基盤の上に立ち、ブルジョア民族的保守主義、「永遠の民族」といった反動的神話、人種イデオロギーに徹底的に反対した。この歴史的アプローチは、バウアーの著作に、単にレンナーに対するだけでなく、この時代の多くのマルクス主義的著述家——民族問題に関する彼らの著作は、しばしば抽象的で硬直した性格をもった——に対する真の方法論的優位を与えた。バウアーの方法が、単に現存の民族構造の歴史的説明を残しただけでなく、過程としての、すなわち絶え間ない変動の中にある運動としての民族という概念を残したかぎりでは、彼は一八四八—九年のエンゲルスのあやまちを避けることができた。彼はいう。ある民族（チェック人のような）が「かつて歴史を持ったことがない」という事実は、その民族が未来を持たないであろうということも必ずしも意味するものではない。中部ヨーロッパ

パとバルカンにおける資本主義の発達は、「非歴史的」民族の同化ではなくして覚醒をもたらししている、と。

レーニンと自決権

民族問題は、レーニンが民族自決という基本的なスローガンにもとづく労働運動のための一貫した革命的戦略を（マルクスの著作にもとづきながら、それをはるかに越えて）作り上げることによってマルクス主義の理論を大幅に前進させた領域の一つである。その一貫性と現実主義において、レーニンの教義は、この時代の他のマルクス主義者の立場、この問題に関してレーニンに最も近かったカウツキーやスターリンの立場に比べてさえはるかに進んだものであった。

一九一四年以前のカウツキーの立場は、レーニンの立場と同様なものであった。だが、民族の基礎としての言語に対する一面的な、ほとんど排他的な集中と、民族分離権の公式化における明確さと大胆さの欠如によって特徴づけられていた。一九一四年以後、民族の権利についてのカウツキーのあいまいな矛盾した立場は、戦争という背景の中で、レーニンによって「偽善的」で「日和見主義的」だとして激しく非難された。

スターリン

スターリンの『マルクス主義と民族問題』⁽²⁸⁾という有名な論文

に關していえば、これを書くためにスターリンをウイーンに送ったのがレーニンであったということ、また彼が一九一三年二月のゴリキー宛の手紙の中で、「大論文に熱心にとりくんでいるすばらしいグルジア人」⁽²⁹⁾について語ったことは本当である。だが、この論文がひとたび完成したのちには、(神話的な人気とは反対に)レーニンが、特にこの論文に熱狂したというふうにはみえなかった。彼は、一九一三年十二月二十八日という日付のある一論文において、ついでに簡単な挿入的な言及をしたのを別にすれば、民族問題に關する彼のおびただしい著作のどこにおいてもこの論文にはふれていない。スターリンの著作の主要な論点は、ボルシェヴィキ党とレーニンのそれでもあったということは明らかである。こう言ってしまったあとでは、この論文がレーニンによって指示を与えられ、監督され、「一行一行」訂正されたのだというトロツキーの示唆は疑わしいようにみえる。⁽³⁰⁾ 反対に、一定の数のかなり重要な点で、スターリンの著作は、暗示的にも明示的にもレーニンの著作とはちがっており、時には矛盾してさえいるのである。

1、「民族的性格」や、民族の「共通の心理的構造」、「心理的特質」といった概念は、決して、レーニン主義者のものではない。この問題ある表現は、バウアーからの伝承であり、レーニンは、その「心理的理論」のゆえに、バウアーをはっきりと批判していた。⁽³¹⁾ 事実、民族的心理という思想は、民族問題のマル

クス主義的分析とよりも、皮相で科学以前の民俗学とより多くの共通点を持っている。

2、「これらすべての特徴(共通の言語、地域、経済生活、『心理状態』)が同時に存在する場合にはじめて民族があたえられるのである」と大胆に述べることによって、スターリンは、自分の理論に、レーニンには全く見出されないドグマ的で、限定的で硬直した性格を与えた。スターリン主義者の民族概念は、実際、イデオロギー的なプロクルステスのベットであった。スターリンによれば、グルジアは、一九世紀の後半以前には、「共通の経済生活」を持たず、経済的に独立したいくつかの公国に分かれていたがゆえに、一民族をなしていなかったという。この基準に対してさらに、関税同盟以前のドイツもやはり民族をなしていなかったということをつけ加える必要はないであろう……レーニンの著作のどこにも我々は、このような極限主義的な硬直した恣意的な民族の「定義」を見出さないのである。

3、スターリンは、多民族国家内に分散している民族グループの統一や結合の可能性を認めることをはっきりと拒否した。「問題は次のようである。それほど異なったものになっているグループを唯一の民族同盟に統一することが可能なのか?……たとえば、バルト諸国のドイツ人とトランスコーカサスのド

イツ人が『一つの民族に統一』されうるといふことが考えられるであろうか？」もちろん、その答は、そうしたことは全く「考えられず」、「不可能であり」、「ユートピアである」というものであった。対照的にレーニンは、「いかなる国のいかなる民族であれ、あらゆる共同体に自由に結合することができるという結合の自由」を精力的に弁護し、まさに実例として、コーカサス、バルチック、ペトログラード地域のドイツ人をあげた。彼は、国内の、あるいは地球全体さえも異なった地域にちらばっている民族の成員のあらゆる種類の結合の自由は、「議論の余地のないことであり、偏狭な官僚的な視点からのみ反対されるものである」とつけ加えた。

4、スターリンは、大ロシア・ツァーリズムの抑圧的民族主義と被抑圧民族の民族主義とを区別しなかった。その論文の非常に暴露的な一節において、スターリンは、「上から」のツァーリの「好戦的・抑圧的」な民族主義と、ポーランド人、ユダヤ人、タタール人、グルジア人、ウクライナ人等々の「愚鈍なジョーヴィニズムに時々転化する下からの民族主義の波」とをともに拒否した。彼は、単に「上から」の民族主義と「下から」の民族主義を区別しなかっただけでなく、民族運動に対して「断固たる態度」ととらない被抑圧諸国の社会民主主義者に対して彼の最も鋭い批判をむけた。他方、レーニンは、抑圧民族の民族主義と被抑圧民族の民族主義のちがいを決定的なもの

であると考えていただけでなく、意識的にせよ無意識的にせよ、大ロシア民族のジョーヴィニズムに降伏したような人々をつねに最も激しく攻撃した。彼の論争の主要な標的の一つがポーランド民族主義に反対するその「明確な」立場のゆえに、ロシア帝国からのポーランドの分離の権利を否定することになつてしまった被抑圧民族ポーランドのマルクス主義的社会民主主義者であつたということは何ら偶然ではない。レーニンとスターリンの間のこのちがいは、きわめて重要なものであり、ここにすでに後のグルジア民族問題（一九二二年十二月）をめぐる両者の激しい衝突——レーニンの有名な「最後の闘争」——の萌芽が含まれていたのであつた。

レーニン

民族問題に関する戦略を作り上げる上でのレーニンの出発点は、ルクセンブルク、トロツキー、パンネックと同じものであつた。すなわち、プロレタリア国際主義であつた。しかしながら、レーニンは、革命左派のこれらの仲間たちよりもよりよく国際主義と民族自決権の間の弁証法的関係を理解することができた。まず第一に、彼は、分離の自由のみが、自由で自発的な同盟、結合、協力、結局のところ民族間の融合を可能にすることを知っていた。第二に、彼は、抑圧民族側の労働運動による被抑圧民族の自決権の承認のみが、被抑圧民族の敵意や疑念を消し去るのを助け、両民族のプロレタリアートをブルジョア

ジーに対する国際主義的闘争へと統一するのを助けることを知っていた。

同様に、レーニンは、民族民主的な闘争と社会主義革命の間の弁証法的関係を把握し、被抑圧民族の人民大衆（単にプロレタリアートのみならず、農民やプロブルジョアジーをも含む）が、意識的なプロレタリアートの同盟者であることを示した。この意識的なプロレタリアートの仕事は、「偏見や反動的な空想、弱さ、あやまり」を伴うプロブルジョアジーやおくれた労働者の分子を含むこの「全くまちまちの異質な大衆」を資本主義とブルジョア国家への闘争へと指導することにあるのである³⁴。しかしながら、ロシアに関しては、レーニンが、ロシア帝国内の被抑圧民族の民族解放闘争を単に民主主義的運動としてだけでなく、ソヴィエト社会主義革命におけるプロレタリアートの同盟者として見はじめたのは、実際には、彼が永久革命戦略を採用した一九一七年四月以降のことであったというのはたしかである。

方法論的見地からすれば、同時代人の多くの人々に対するレーニンの主要な優越点は、「政策を自由に駆使する」能力、すなわち、あらゆる問題とあらゆる矛盾の政治的側面を把握し、強調する執ような、不屈の、絶えざる、ひるまない性向であった。この性向は、一九〇二―三年の党の問題をめぐるエノミノ

ストとの論争の中に、一九〇五年の民主革命の問題をめぐるメンシェヴィキとの討論の中に、一九一六年の帝国主義に関する著作の独創性の中に、一九一七年の四月テーゼがもたらした天啓のような転換の中に、彼の最も重要な著作『国家と革命』の全体の中に、そしてもちろん、民族問題に関する彼の著作の中にきわだっている。政治的レベルがますます支配的なものになる（もちろん、究極のところは経済によって決定されているとしても）ようにみえる帝国主義の時代である二〇世紀におけるレーニン思想の（とりわけ）顕著な現実性を説明するものは、この方法的局面なのである。

民族問題に関していえば、多くの他のマルクス主義著述家たちが、ただこの問題の経済的・文化的・心理学的次元のみをみていたのに対し、レーニンは、自決の問題は、「もっぱら政治的民主主義の領域に属する」³⁵、すなわち、政治的分離と独立した民族国家創設の権利の領域に属することを明確に述べた。さらに、レーニンはこのちがいの方法論的基礎について完全に自覚していた。すなわちいう。「『自治権をみとめられていないにすぎない』民族は、『主権をもつ』民族と同じだけの権利を享受することはできない。我々のポーランドの仲間たちは、（我々の古い経済主義者たちのように）政治的概念やカテゴリーの分析をすることを頑固に避けなかったならば、このことに気づかないということはありません³⁶」。

のように政治過程の相対的自律性を理解していたおかげで、レーニンは、民族問題の分析において、主観主義と経済主義の双方を避けることができたのであった。⁽³⁷⁾

いうまでもないことであるが、民族問題の政治的側面といっても、レーニンにとっては、大臣や外交官や軍隊が関心を持っているものとは似ても似つかぬものであった。彼は、あれこれの民族が独立国家を持つべきであるかどうか、二つの国家の間のどこに国境が引かれるべきかということに関しては全く無関心であった。彼の目的は、民主主義であり、プロレタリアートの国際的統一であって、この両者が、民族自決権の承認を要求しているのであった。さらに、まさに政治的側面に集中した結果として、彼の自決理論は、民族主義にいささかでも譲歩するものではなかった。それは、もっぱら民主主義闘争とプロレタリア革命の領域に位置していた。

これら二つの目的が、レーニンの思想の中で、同じ重要性を持つてはいなかったというのは本当である。民主主義の要求は、つねに世界プロレタリアートの革命的階級闘争の利益に従属させられねばならなかった。たとえば、レーニンによれば、もし共和主義的運動が、特別な場合に、反動の道具に転化する(一九七一年のカンボジアノ)ような場合には、マルクス主義者はそれを支持してはならないのであった。だが、このこと

は、労働者階級の運動が、その綱領から共和主義を削除してしまわなければならないということの意味するものではない。同じことが、必要な変更を加えて、自決にもあてはまる。たとえば、いくつかの例外はあるにしても、一般的原则は、あらゆる民族の分離の権利である。事実、自決権の承認が、労働者の間に国際的統一のための条件を作り出すのに第一級の重要性を持っているというレーニンの分析は、暗に、「例外」の可能性、すなわち、プロレタリアートの利益と諸民族の民主的権利の間の矛盾の可能性さえも排除する傾向がある。

結論 歴史の教訓

民族問題の諸側面をめぐるマルクス主義者の特異な論争のいくつかは、歴史によって解決された。オーストリアーハンガリーの多民族国家は、第一次世界大戦後、いくつかの民族国家に解体した。エンゲルスによれば、「本質的に反動的な民族」であるバスク人は、今日、スペインにおける革命闘争の頂点にある。ルクセンブルクが、プチブルジョアのユートピアだと述べたポーランドの再統一は、一九一八年に現実になった。「民族的生命力」の欠如のゆえに消え去る運命にあるとされた「非歴史的」チェック民族(エンゲルス)は、スロヴァキア民族との自発的連邦を通じて一国家を設立した。

一九一七年以後の歴史の経験はまた、民族というものは、単

に抽象的で外的な基準の寄せ集めではないということを示した。主観的要素、すなわち、民族的帰属意識、民族的政治運動も同様に重要である。明らかに、これらの「主観的要素」は、だしぬけに出てくるものではない。それらは、一定の歴史的諸条件——迫害や抑圧等々の結果である。だが、このことは、自決がより広い適用範囲をもち、それが単に分離だけでなく、「民族的存在」そのものにもかかわるものであることを意味している。ある社会が、民族をなすかどうかを決定するものは、(スターリン流の)一連の「客観的基準」で武装した教条的な「専門家」ではなくして、社会そのものである。³⁸⁾

他方で、ウッドロウ・ウィルソン以来ずっと、大国の民族主義は、民主主義、諸民族の平等、自決権というスローガンを盗用することによって、自身のイデオロギー的武器庫を豊かにしてきた。これらの原則は、今もいたるところのブルジョア政治家によって宣言されている。リンドン・ジョンソンは、合衆国の大統領であった時、一九六六年におごそかに宣言した。「我々は、南ベトナムの人民が、彼ら自身の未来を自由に選ぶことができるように自決の原則を保持するためにたたかっている³⁹⁾」。アフリカにおける暴動に際して、トライチュケが、「野蛮人との戦争に通常の戦争の原則を適用することは、純粹にばかげたことである。黒人の部族は、村に火をかけることによつて懲められねばならない。なぜなら、これが効果的な唯一の矯

正法だからである⁴⁰⁾と書いた——一九世紀以来、小民族に対する大国の政策は、見分けもつかない程に変わったのであろうか。労働者の運動の政治的健康に対する今日の真の脅威は、ルクセンブルクの高邁なあやまりが示しているようなあどけない混乱ではなく、はるかに危険な性格の病理学的現象、すなわち、大国のショーヴィニズムのピールスト、ロシアと中国の官僚制およびかれらの門弟たちによって国際的にひろめられたブルジョア民族主義への日和見主義的降伏のピールストである。事実、民族問題に関する「ウルトラ急進主義」は、今日ほど生き残っていない。革命的左派のいくつかのセクトの中のみ、なお時々、民族解放運動への抽象的反対という形で、「労働者階級の統一」とインターナショナルリズムの名で、ルクセンブルクのテーゼのかすかな反響が見出される。同じことは、エンゲルスの「反動的民族」の概念についてもあてはまる。かくして、もし人が、今日の民族問題、すなわち、民族的・植民地的・宗教的・人種的側面が結合し交錯する複雑な問題のいくつか——たとえば、アラブとイスラエルの闘争、北アイルランドのカソリックとプロテスタントのたたかい——をみるならば、彼は、革命的左派にまといつく二つの相反する誘惑のあることに気づくであろう。第一の誘惑は、パレスチナ人やアルスターのカソリックの民族運動の正当性を否定し、これらの運動を「ブチ・ブルジョア的なもの」として、労働者階級を分裂させるものとし

て非難し、それらに対して、あらゆる民族、人種、宗教のプロレタリアートの間の統一の必要という原則を抽象的に宣言することである。第二の誘惑は、これらの運動の民族主義的イデオロギーを無批判に支持し、支配民族（イスラエルのユダヤ人、北アイルランドのプロテスタント）を、階級の区別なしに、一把ひとからげに「反動的民族」——自決権の否定される民族——として非難することである。

革命的マルクス主義者が直面している課題は、これら一対の暗礁にのりあげるのを避け、——具体的状況の具体的分析を通じて——真に国際主義的なコースを発見することである。そして、このコースは、レーニンとトロツキーによって指導されていた時代のコミンテルン（一九一九—二三）の民族政策と、レーニンとルクセンブルクの双方によって、その価値が認められていた第Ⅱインターナショナルの一九〇六年大会の有名な決議からインスピレーションをひき出すべきなのである。この大会の決議は次のようにいう。「本大会は、あらゆる民族の完全な自決権を支持し、現在、軍事的・民族的もしくはその他の専制主義の圧制のもとに苦しんでいるあらゆる国の労働者に同情を表明する。また本大会は、これらすべての諸国の労働者に対して、全世界の階級意識ある労働者の戦列に加わり、彼らとともに国際資本主義の打倒のため、また国際社会民主主義の諸目的達成のためにたたかうようよびかける」。

〔原注〕

- (1) Karl Marx, *The German Ideology*, Moscow 1964, p. 76. Cf. Friedrich Engels, 'Das Fest der Nationen in London' (1846), in Marx, Engels, Lassalle, *Aus dem literarische Nachlass*, Stuttgart 1902, Vol. 2, p. 408. 「ヨーロッパ共和国とか、政治組織のもとでの恒久の平和とかいった妄想は、全面的な自由貿易の庇護のもとでの諸民族の結合といった空文句と同じくプロテスタントなものになっている。……どの国のブルジョアジーも、自分自身の特殊な利害をもっており、民族の枠を越えることができない。……だが、万国のプロレタリアートは、唯一の共通の利害、唯一の共通の敵をもち、唯一の共通の闘争に直面している。ひとりプロレタリアートのみが、民族性を廃止することができ、めざめつつあるプロレタリアートのみが、諸民族の兄弟的結合を作り出すことができるのである……」。
- (2) この問題に関しては、ポーランドのマルクス主義者ローマン・ロスドルスキの注目すべきエッセイを見よ。Roman Rosdolsky, 'Friedrich Engels und das Problem der "geschichtslosen" Völker', *Archiv für Sozialgeschichte* W, 1964.
- (3) Engels, 'The Magyar Struggle', in Marx, *The Revolutions of 1848*, London 1973, pp. 221-2.
- (4) Engels, 'Deutschland und der Panlawismus', (*Neue Oder Zeitung* 1855), MEW XI, cited in Rosdolsky, op. cit. p. 174.
- (5) Engels, 'What is to Become of Turkey in Europe?' (*New York Daily Tribune* 1853), MEW K, cited in

Rosdolsky, op. cit. p.174.

(9) Engels, 'What Have the Working Classes to Do with Poland?', in Marx, *The First International and After*, London 1974, pp. 378-88.

(10) Engels, 'Anfang des Endes in Österreich' (1847) MEW W, p. 510.

(11) Engels, 'The Magyar Struggle', op. cit. p. 219.

(12) 'La questione polacca al congresso internazionale di Londra', *Critica Sociale*, 16 July 1896, No. 14, pp. 217-20.

(13) *Die industrielle Entwicklung Polens*, Leipzig 1898.

(14) V. I. Lenin, *Collected Works*, Vol. 3.

(15) Luxemburg, 'Nationalität und Autonomie' (1908), in *Internationalismus und Klassenkampf*, Neuwied 1971, pp. 236, 239.

(16) Luxemburg, 'The Junius Pamphlet', in Mary-Alice Waters (ed.), *Rosa Luxemburg Speaks*, New York 1970, p. 304.

(17) Luxemburg, 'Theses on the Tasks of International Social Democracy', *ibid.* p. 329.

(18) Luxemburg, 'Sozial-patriotische Programmaktualität', in *Internationalismus und Klassenkampf*, op. cit.

(19) Cf. Georg Lukács, 'Critical Observations on Rosa Luxemburg's "Critique of the Russian Revolution"' in *History and Class Consciousness*, London 1971, pp. 272-95.

(20) Cf. Lenin, 'On the Right of Nations to Self-Determination', *Collected Works*, Vol. 20, p. 430.

「民族主義的の面目となったポーランドのプチブルジョア階級の闘争が、ポーランドの社会民主主義者に特別な（特別な）要求を生じた」云々（この文章は、熱心な読者の手紙に答えて書かれたものである）。

(21) Luxemburg, 'Vorwort zu dem Sammelband "Die polnische Frage und die sozialistische Bewegung"' in *Internationalismus und Klassenkampf*, op. cit.

(22) Leon Trotsky, *The Bolsheviks and World Peace*, New York 1918, pp. 21, 230-1, etc.

(23) *Nashe Slovo* 130, 135 (3 and 9 July 1915), reprinted in Vol. 9 (1927) of Trotsky's *Collected Works* in Russian.

(24) Cf. Trotsky, *History of the Russian Revolution*, London 1967, Vol. 3, p. 62. 「ソ連の革命の将来の運命は、ソ連の民族政策に人類の永遠の運命の鍵が掛かっている」。

(25) Anton Pannekoek, *Klassenkampf und Nation*, Reichenberg 1912; Josef Strasser, *Der Arbeiter und die Nation*, Reichenberg 1912.

(26) Karl Renner, *Marxismus, Krieg und Internationale*, Stuttgart 1917, p. 26.

(27) Cf. Arduino Agnelli, *Questione nazionale e socialismo*: K. Renner e O. Bauer, Bologna 1969, p. 109.

(28) Otto Bauer, *Die Nationalitätenfrage und die Sozialdemokratie*, Vienna 1924, p. 404.

(29) *Ibid.* pp. 105-8.

(30) *Ibid.* pp. 239-72. 「ベトナムの文化的目的の綱領は、

決権の承認にもとづく政策への補充物——二者択一でなしに——としての価値をいへるか持つてゐるものがつけ加えられるべきである。事実、ソヴァエト同盟の最初の憲法は、少数民族の文化的自治の原則をいくぶんか含むものであった」。

- (88) Joseph Stalin, 'Marxism and the National Question', in *Works*, Moscow 1953, Vol. 2, pp. 300-381.
- (89) Lenin, *Collected Works*, Vol. 35, p. 84.
- (90) Cf. Trotsky, *Stalin*, London 1969, Vol. I, p. 233.
- (91) Lenin, 'The Right of Nations to Self-Determination', in *Collected Works*, Vol. 20, p. 398.
- (92) Stalin, op. cit. pp. 306-7, 309, 305. and 339.
- (93) Lenin, 'The National Programme of the RSDLP', *Collected Works*, Vol. 19, p. 543. and 'Critical Remarks on the National Question', in *Collected Works*, Vol. 20, pp. 39, 50.
- (94) この問題に関しては、一九一六年のアイルランドの蜂起についてのレーニンの分析が、革命的リアリズムのモデルである。'The Discussion of Self-Determination Summed Up', *Collected Works*, Vol. 22, pp. 353-8. をみよ。
- (95) Lenin, 'The Socialist Revolution and the Right of Nations to Self-Determination', *Collected Works*, Vol. 22, p. 145.
- (96) Lenin, 'The Discussion on Self-Determination Summed Up', op. cit. p. 344. (Translation modified)
- (97) これは、A. S. ナイールとO. スカラブリンが、そのすべての論議の中で強調してゐる点である。'La qu-

estion nationale dans la théorie marxiste révolutionnaire', *Partisans* 59-60, May-August 1971.

- (98) 合衆国の黒人についてのトロツキーを参照せよ。「抽象的基準は、この場合決定的ではない。より決定的なのは、歴史的意識、感情、情念である」。Trotsky on *Black Nationalism and Self-Determination*, New York 1967, p. 16.

(99) Quoted in A. Schlesinger Jr., *The Bitter Heritage*, Boston 1967, p. 108.

(100) Heinrich von Treitschke, *Politics*, London 1916, Vol. 2, p. 614.

(一九八五・九・七)